

周辺の
みどころ

杣川沿いは、甲賀市域でも城の銀座ともいえる場所である。甲賀の城と云えば甲賀武士団の城を指すが、私たちになじみのある近世の城のような天守や櫓などが立ち並ぶ城ではない。その姿は、土塁や堀で囲われた「土作りの城」で、村を守る「むらの城」である。

矢川神社はこれら武士団で構成されている地域惣中（自治組織）の土豪達が会合を開く寄合い所にもなっていた。神社の対岸、甲南町新治には竹中城や倉治城を見ることが出来る。

また、甲賀流忍術屋敷では江戸時代の建物に仕掛けられたカラクリを楽しむことができる。



甲賀流忍術屋敷（びわこビクターズビューロー提供）



杣川の水運 矢川神社・矢川津

甲賀市甲南町森尻



参道から矢川神社をのぞむ

古代から甲賀の地域支配の拠点として、また物流の集積地として重要な役割を果たしていたのが、杣川の水運と矢川津である。

川の名前となっている「杣」は、この一帯が古代より木曾の山林にも劣らないほどの樹木が広がっており、古代にはこの木材を平城京や東大寺などに供給する杣山として利用されていた事に由来する。切り出された木材は、「甲賀山作所」役所を経て、現在の甲南町矢川橋付近の川辺にあったとされる「矢川津」と呼ばれる川津に運ばれ、そこから川伝いに琵琶湖に一旦流され、後に瀬田川を下らせて奈良へと運ばれていったのである。

山から川、川から湖、そして再び湖から川へ。まさに近江水の宝にふさわしい情景である。



【アクセス】

- JR草津線の甲南駅下車。
矢川神社まで北へ約500m。

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

- 滋賀県『滋賀県指定有形文化財 矢川神社楼門
保存修理工事報告書』平成19年



柚川の水運 矢川神社・矢川津

所在地 甲賀市甲南町森尻

柚川の水運

矢川は現在の滋賀県甲賀市域を流れる淀川水系の一級河川で、延長は24kmを測り、流域面積は108 km²ある。水口町宇川地先で野洲川と合流し、野洲川の支流としては最大のものである。油日岳を源としていたこともあり、古くは油日川と呼ばれていたこともあったが、後には「柚川」と呼ばれるようになった。

この近辺には甲賀柚と呼ばれる山林が広がり、宮都や寺院などの建築資材として用いられていた。畔ノ平遺跡においては巨木を楔で割り、製材しようとした半製品が出土しており、甲賀柚の姿を垣間見ることができる。

また、正倉院文書によると紫香楽宮周辺にあった藤原豊成らの邸宅を柚川―野洲川―琵琶湖を経て石山寺へと運んだことが記されていることから、甲賀柚から伐り出された木は、同様のルートを進んで搬出されたと考えられる。

柚川と柚街道

水運として利用されていた柚川沿いには、大津宮時代に、古東海道といわれる「倉歴越」が平行して通っていた。この道は、壬申の乱後に一旦廃れていたが、平安時代の仁和2年(886)には鈴鹿峠経由で関に至る「阿須波越」に変更されるまで東海道ルートとして利用されていた。その後も湖南から伊賀に抜ける「伊賀道」として、また、伊勢参宮の間道として人々の主要道として活用されていた。

江戸時代に入ると、三雲から東海道と分れて伊賀へ至る現在のものに近いルートとなり、寛保2年(1742)の資料には「柚海道」の名称が確認されるようになった。現在のルートが整えられたのは明治20年代のことである。

この後、明治22年(1889)に関西鉄道が開通し、明治40年(1907)に国有化され現在のJR草津線となっている。かつて、水運の拠点であった地は、その後陸運の拠点としても活躍したのである。

矢川神社周辺空中写真(左上)
藤原豊成邸復元模型(左下)
甲賀市畔ノ平遺跡出土木材(右上)
同木材製のようす(右下)
いずれも甲賀市教育委員会提供



矢川神社楼門(左上・下)、本殿(右上)

矢川神社

矢川神社は、柚川畔に位置する神社である。御祀神は大己貴神、矢川枝姫である。矢川枝姫命は八河江比売、矢河枝比売とも記され、柚川水系の司水神として矢川津の地に祀られた守り神である。川津や水との深い関わりがある神社であることがこのことからわかる。境内は史跡、楼門は滋賀県指定文化財、本殿は甲賀市指定文化財である。

創建は、聖武天皇の紫香楽宮造営時と伝わる。延喜式人名帳に記載されている式内社甲賀八座

の筆頭に置かれている古社で、中世には新宮神社・日吉神社と共に「柚三社」と称され、柚川の諸村を結びつける精神的な核として重要な役割を担っていた。

また、神社は甲賀の雨宮の別名もあり、雨乞いに霊験あらたかとされている。

大和国布留郷の農民が石上神社の託宣を受けて矢川神社に雨乞いの願をかけ、五穀豊穰成就したとして、返礼に寄進されたのが楼門である。